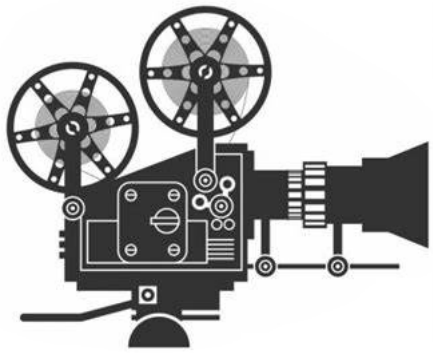


いにしえの映画つれづれ⑭
「野良犬の罠」村上春樹氏も称賛の隠れた探偵物の佳作

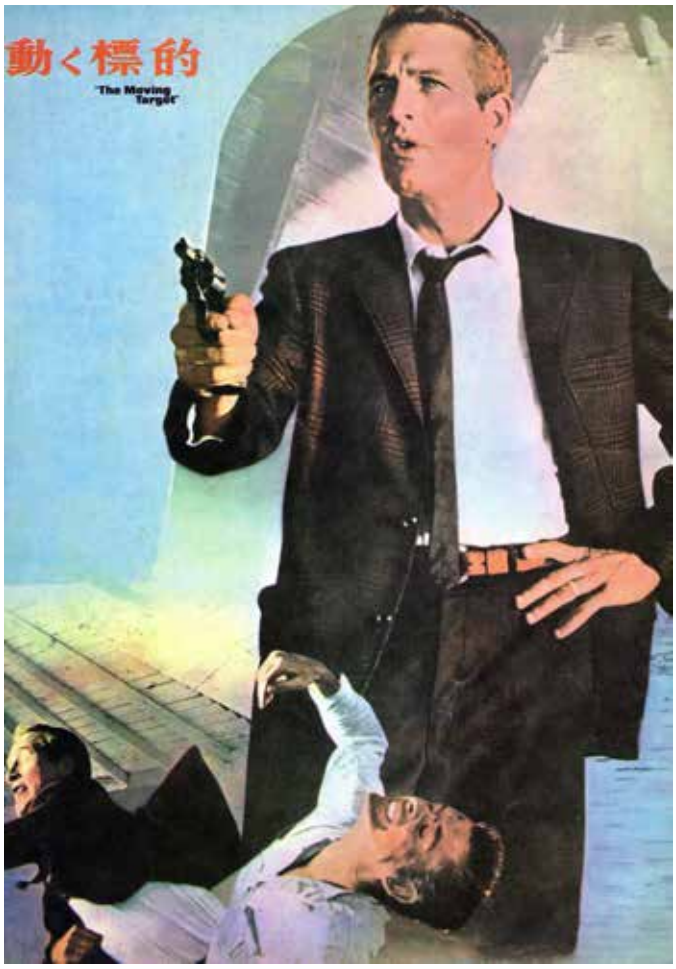
千葉豹一郎

現在、BS12でリピート中の「特攻野郎Aチーム」。チームを率いるジョン“ハンニバル”・スミス大佐役のジョージ・ペパードは、1960年代前半には将来を嘱望された有望株だった。「スクリーン」で“ぼくの採点表“を半世紀に渡って担当していた、映画評論家の故双葉十三郎氏のご贔屓でもあった。

マーロン・ブランドやポール・ニューマンらを輩出した名門アクターズ・スタジオの出身。ブロンド、青い目のハンサムで演技力にも優れ、オードリー・ヘプバーンの相手役を務めた「ティファニーで朝食を」(61)で脚光を浴びて、オールスターのシネラマ大作「西部開拓史」(62)では事実上後半の主役を演じた。軍隊の非情さを描いた「勝利者」(63)、謎の大富豪ハワード・ヒューズをモデルにしたといわれる「大いなる野望」(64)といった問題作にも主演して人気を高め、映画雑誌のグラビアもたびたび飾っていた。軍服やヘルメットもよく似合い、「クロスボー作戦」(65)「ブルー・マックス」(66)「トブルク戦線」(67)等の戦争映画でも活躍した。第一次大戦のドイツ軍撃墜王に扮した「ブルー・マックス」では、パイロットの免許まで取得して撮影に臨んだ。ディーン・マーティン共演の西部劇「ジェリコ」(67)にも主演したが、人気に陰りが見え始め、記憶喪失の主人公を演じた「第三の日」(65)あたりから、B級っぽいやや小ぶりのアクション物が主流となっていった。1962年に「007は殺しの番号」が登場し、世界的にスパイ物が大流行。しかし、乱作もたたって次第に飽きられ、66～7年頃からフランク・シナトラの「トニー・ローム 殺しの追跡」(67)「刑事」(68)、リチャード・ウィドマークの「刑事マディガン」(68)等の刑事や探偵を主人公にした作品が復権してきた。その中で、私立探偵を好演した今回の「野良犬の罠」(68)は、ペパードの個性と魅力がもっとも発揮された代表作の1本といえよう。

「ブルー・マックス」で意気投合したジョン・ギラーミン監督と再びタッグを組み、ニューヨークの私立探偵を小粋に演じた。村上春樹氏も、「銃口」(67)「ポイント・ブラ

「野良犬の罠」の劇場パンフ。
部数も少なく、最近はさらに中古価格が急騰しているらしい。

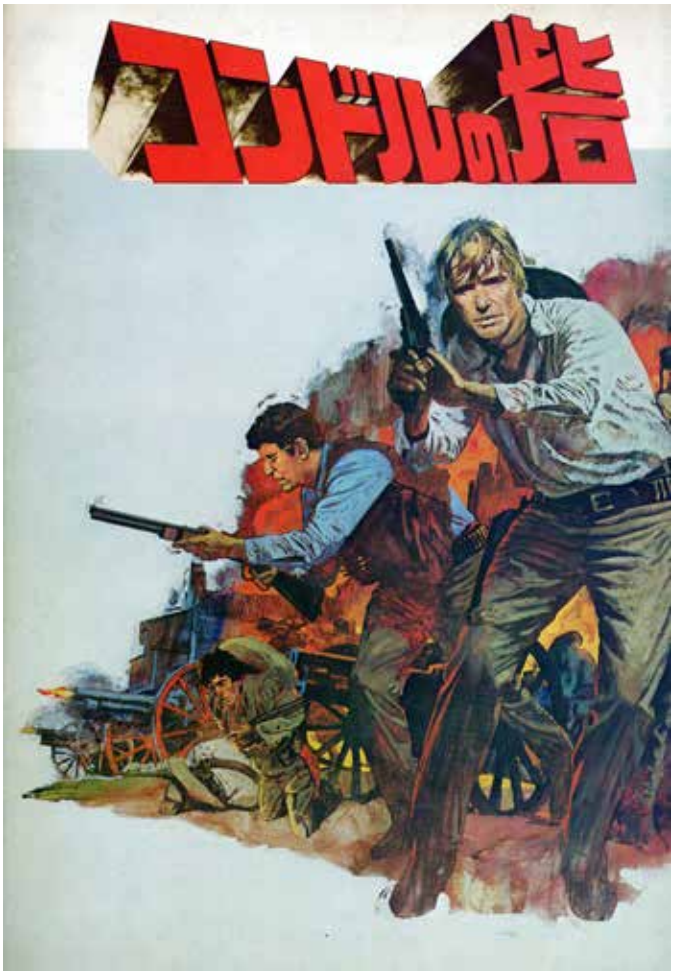


「動く標的」のポール・ニューマン。

ンク 殺しの分け前」(67)と並んで、最も再見したい映画の一本に挙げている。このように結構評価は高いのに、ポール・ニューマンが私立探偵に扮した「動く標的」(66)とバッティングしたせいもあってか、その陰に隠れてあまり知られておらず、知る人ぞ知る存在となっている。以前、別の雑誌でこの映画に触れた際、きちんと校正もしたのに、送られてきた掲載誌を見たら、何と「野良猫の罠」になっていた（笑）！この雑誌は、新聞も含めたどの連載よりも読者からの感想や要望が多く寄せられ、テレビ草創期の「ララミー牧場」の回では百通以上の手紙が送られてきた。幸い苦情等が来たことはなかったが、熱心で知識も豊富な読者が多いゆえ、とんだ黒星で汚点をつけてしまったと思った。ところが、蓋を開けたら、間違いを指摘する声は一件もなく、拍子抜けすると同時に、この映画の知名度の低さをあらためて実感させられた。日本ではソフト化されたこともなく、半世紀前に90分枠でテレビ放映され、その後1,2度リピートされたきりで現在ではほとんど忘れられている。

探偵物は映画、テレビで昔からひとつのジャンルになっていて、ストーリー的にはそうそう新味のあるものにはお目にかかれない。結局、全体のムードや主役の個性と魅力で決まってくる。その好例が「三つ数えろ」(46)である。ハードボイルドの開祖レイモンド・チャンドラーの原作を、ノーベル賞作家の文豪ウィリアム・フォークナーらが脚色を担当し、名匠ハワード・ホークスが監督。キャストもボギーことハンフリー・ボガートと実生活での夫婦ローレン・バコール等一級のメンバーが揃っているが、ストーリーが複雑で犯人が誰なのか判らずじまいという、この手の映画としては致命的な欠点を持っている。しかし、ハードボイルドな雰囲気が全編に漂い、ボギー演じるフィリップ・マーロウがピタリとハマって傑作となった。原作者のチャンドラーによれば、マーロウはケーリー・グラントが一番近いと語っていた。だが、グラントが私立探偵を演じたことは一度もなく、どうもしっくりこなくてボギーしか思い浮かばない。ボギーは、チャンドラーと並ぶハードボイルドの巨頭ダシェル・ハメット原作の「マルタの鷹」(41)で演じた私立探偵サム・スペイドが高く評価され、主演級のスターに昇格した。ボギーは私立探偵が最も似合う俳優といわれ、スーツをラフに着こなしタイピンをせずにネクタイをなびかせるスタイルは、探偵ルックとしてひとつの定番となった。以後も踏襲され、ポール・ニューマンがロス・マクドナルド原作の「動く標的」で演じたルー・アーチャー（映画ではルー・ハーパーになっている）も、このいで立ちで登場する。しかし、スーツもネクタイも崩し過ぎて、わざとらしさが鼻についた。ニュー

全盛期の「ブルー・マックス」。



「コンドルの砦」。都会的なペパードには西部劇はあまり似合わなかった。

マンは多くの業績があり、代表作の「ハスラー」(61)や「暴力脱獄」(67)等は素晴らしかった。私生活も申し分なく、社会貢献活動にも熱心で立派な人物なのだが、肝心の演技の方はいつも大げさなのが感心できなかった。ファンの方には申し訳ないが、個人的にはどうもこの点が引っかかるのだ。そこへいくと、「野良犬の罠」のペパードは、スーツやネクタイの崩し方がごく自然な感じがしてリアリティがあった。無地のダークスーツとネクタイがとても良く似合い、ベストドレッサーの誉れ高いケーリー・グラントにも引けを取らず本当にカッコよかった。この頃にはすでに廃れつつあったソフト帽をあみだに被り、演技と着こなしで、うらぶれた私立探偵の雰囲気を実にうまく体現していた。今では時代遅れとなったソフトを被り、似合いもしないのに一人で悦に入っているどこぞの国の政治家とは大違いだ。映画評論も手がけた作家の故加納一朗氏も、ペパードを一番私立探偵が似合う俳優と絶賛していた。

映画も実にスタイリッシュで、カメラワークも随所に斬新な工夫が見られ、上り坂だったギラーミンの才気がみなぎっていた。

ペパードの他には、仇役のテレビ「ペリー・メイスン」「鬼警部アイアンサイド」のレイモンド・バー以外は、「ワイルド・エンジェル」(66)でデビューし初の大役となるゲイル・ハニカットらで有名スターはおらず、ほとんどペパード一人で持っている。

ストーリーは罠にはめられた私立探偵が、疑いを晴らし真相を究明するために奔走するという典型的な探偵物。

元MPのP・J・デットワイラー(ペパード)は、今はニューヨークのしがない私立探偵。事務所もなく、下町のバーを事務所代わりにしている。あまり仕事もなく、別れさせ屋のようなことまでしていた。そんなP・Jにケチで冷徹な大富豪オービソン（バー)から仕事が舞い込む。オービソンは若い愛人モーリン（ハニカット)を囲い、不仲な本妻の二人を相続人とする遺言状まで書いていた。依頼の内容は、脅迫を受けたモーリンのボディーガードだった。モーリンは何者かに襲われ、オービソンはP・Jの反対を押し切って、バハマ諸島へ一行を引き連れて避難した。しかし、モーリンが再び襲われ、反撃したP・Jが倒したのは空の拳銃を持ったオービソンの部下グレノーブル（ジェーソン・エヴァーズ)だった。逮捕されたP・Jはオービソンの圧力ですぐに釈放されたが、クビになり一人取り残された。帰国したP・Jは警察にも事件を嗅ぎつけられ、愛し合うようになったモーリンの協力も得て真相究明に乗り出す。グレノーブルは産業スパイで、P・Jは彼を消すため罠にはめられたのだった。狩猟に出かけたオービソンと決着をつけるべく向かったP・Jの前に、意外な真犯人が現れる・・・。

ペパードはこの後、三度ギラーミンと組んだスタンリー・エリン原作の「非情の切り札」(68)でもタフガイぶりを見せ、妻殺しの容疑をかけられた刑事の奔走と法と人権とのバランスにも焦点を当てた「ペンダラム」(69)、スパイ物の「華麗なる暗殺」(70)に主演するも、いずれも日本ではスプラッシュと呼ばれる二本立て公開だった。

「コンドルの砦」(70)「最後の弾丸」(72)の二本の西部劇も含めてB級作品ばかりとなり、格落ち感が顕著だった。70年代にはテレビが主流となり、保険調査員に扮したテレビ・ムーヴィー「バナチェック」は日本でも好評で、大人気ドラマ「逃亡者」のモデルとなった事件を扱った「有罪か無罪か」(75)は高い評価を得て、リー・レミック共演の「愛は陽炎

「ペンダラム」のビデオ・パッケージ。ビデオ時代のソフトはこのように高価で、初期の邦画では５万円！というものもあった。

のごとく」(79)等に主演した。

しかし、B 級アクションスターのイメージが定着してキャリアも急降下し、日本では「爆破作戦　基地に消えた男」(72)以降あたりから動向も伝えられなくなって、アルコール依存らしいとの噂も流れた。経済的な苦境にも陥って、この頃がどん底だったと自ら語っている。SF の「世界が燃えつきる日」(77)、戦争によって男女6 人の友情が引き裂かれる、ジョージ・ハミルトンや「荒野の七人」(60)のホルスト・ブッフホルツら60 年代のスターを揃えた「戦争と友情」(79)、「七人の侍」(54)をベースにした「荒野の七人」の宇宙版「宇宙の7 人」(80)が公開された一方、「刑事ニューマン　復讐のレクイエム」(74)と兼監督の「天国への逃走」(79)は未輸入でテレビ放映に止まった。アクション系への傾倒は、狩猟や射撃、銃には自信があったというから本人の志向らしかったが、凋落の原因はその性格にあったようだ。まだ新人同様なのに、「ティファニーで朝食を」では監督のブレーク・エドワーズとことごとく衝突して殴り合い寸前になり、演技論を振りかざしてオードリー・ヘプバーンを困惑させて、共演者で旧知のパトリシア・ニールも呆れさせる傲慢ぶりだったという。全盛期にもかなりの変人といわれ、映画雑誌やパンフレットに奇行や“ペパード語録”まで載っていた。相当に理屈っぽく皮肉屋で、周囲が手を焼いていたらしいことがうかがえた。ユニヴァーサル撮影所でも不人気投票のトップに選ばれ、ジェームス・コバーンが断って回った「A チーム」でも問題行動が多かった。派手なアクションと誰も死なないコメディ調の痛快さが受けて83 年から4 年間続き、80 年代を代表する人気番組の一本となって2010 年にはリーアム・ニーソンら別キャストで「特攻野郎A チーム　THE MOVIE」に映画化もされた。ペパードは主役のリーダー、ハンニバル大佐を生き生きと楽しそうに演じ、再び人気を取り戻した。ところが、息もピッタリに見えたなチームも、裏では深刻な不協和音に悩まされていた。その元凶はペパードだったようで、唯一の女性レギュラーだったメリンダ・クレアを途中からいびり出し、コング役のミスターT とも犬猿の間柄となって口を利かなくなり、フェイスマン役のダーク・ベネディクトが連絡係を務めていたという。いやはや。その前にも日本では大コケした人気ドラマ「ダイナスティ」にキャストインしながら、制作陣とやり合って降板させられている。私生活でも、「大いなる野望」「第三の日」で共演したエリザベス・アシュレイも含めて五度の結婚歴があり、アシュレイはペパードとの苦渋に満ちた結婚生活に重きをおいた自伝を著わしている。“ペパード語録”で数々のトラブルの原因が自らの性格にあることを認めてはいるが、どうも真摯に改めようという意識には乏しかったようである。「A チーム」の終了後は、「L.A. アンタッチャブル」(88)等のテレビ・ムーヴィー、久々に「冬のライオン」で古巣の舞台にも立ったが、94 年に肺ガンのため65 歳で死去。日に三箱も吸うヘビースモーカーで、「A チーム」でも葉巻をくゆらせていた・・・。古き良き50 年代の雰囲気と先進の60 年代の幕開けにふさわしいテイストを併せ持った魅力あるスターだったが、もう少し早く生まれもっと謙虚だったなら、さらに飛躍できただろうに惜しいことをしたものだと思う。

****

「野良犬の罠」1968 年　アメリカ

カラー　P・J

監督　ジョン・ギラーミン

出演　ジョージ・ペパード

レイモンド・バー

ゲイル・ハニカット

****

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30 年代の備忘録（電子版）」(ユニワールド)「猫と映画人（電子版）」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。